

風土



土用芽
神蔵器

端居して三年前と三年後

七月やわが血父似かより母か

凌霄花朝の大地を引き上ぐる

六十年ぶりの同窓会

母校いま泰山木は巨花をあぐ

胸像は初代校長雲の峰

明珍火箸涼しき風を集めをり
大棧橋真直に行く日傘かな
死後のこるもの味噌糞と沙羅の花
櫛大樹の風吹きおろす施餓鬼寺
硯洗ふ星のしづくを掬ひては
千の風吹くくれなゐの土用芽に
七月の真ん中を行く乳母車



竹間集

同人作品



父の日

中谷 葉留

ことしまた播州穴子届けらる
夏服の子と待合はす無人駅
新しき糸通し器や柿の花
父の日の来てはすぐ翔つ小鳥かな
軋ませて閉ざす雨戸や梅雨深し
墓まばたきをなす不思議かな
墓ひとつまばたきしたりけり

ほととぎす

小林 輝子

ずぶ濡れの山河を領すほととぎす
立ち上がる葛の巻葉を風の揉む
海胆啜る角出てくると言はれても
この村にかくし念仏蛇苺
桑苺熟るるや勢ふ堰の水
雨ぎざす街にチャグチャグ馬コ待つ
馬鈴薯の花は動かず風の過ぐ

竹皮を脱ぐ

小野寺節子

万緑のふところ郷よ深眠り
流れゆく真水の使命青水無月
濃むらさき薄むらさきの茄子の花
枝払ひ知恵の手捌き時稼ぐ
くちなしや近所隣りに香を分つ
移り世を知るや知らずや時計草
桂郎の声に竹どち皮を脱ぐ

蚯蚓

小林清之介

言ひかけて噓つづきや梅雨寒し
投函の駄賃を孫に梅雨茫茫
Sの字を描きし蚯蚓のかばねあり
えご落花まねて十葉花つけし
半夏生五時のチャイムが宙に鳴り
思ひ出したやうに間遠の雷折々
一番風呂はや出て団扇つかひをり

モネ展

田村すゝむ

柿の花奥に質屋の蔵二つ
卯波寄す利休の色の安房郡
祭り囃し幫間塚の後ろより
荒神輿渦を乱して曲りけり
モネ展を出て六月の水辺かな
梅雨茜前田百万石の門
マリーナは風の踊り場ヨットの帆

孫文の蓮

瀬戸

悠

石楠花や嘆きは天を向いてをり
ひとりごとえごの落花を踏みながら
木洩れ日にえごの落花の光なす
展げゐる海図に蟻の嵌りをり
滴りや直会の神酒ふるまはれ
十葉や向ひ合はせに齒科と外科
孫文の蓮にひとすぢくもの糸

鎌倉

塩田

博久

片白草群れて寺苑の雨もよひ
蚩袋震はせて過ぐ谷戸の雨
紫陽花や遠く波寄す材木座
梅雨闇の聖堂に遇ふ殉教図
聖堂を辞して溽暑の段葛
翡翠に動体視力たしかむる
紫陽花を嫌ひと言へず句座に居り

梅雨晴間

— 鈴木 石花 —

「竹生島」シテに我が名や梅青し
金亀子模範のテープ繰り返す
素謡の舞台近づく更衣
リハ―サルに窓開け放つ青葉風
芍薬や任せし着付け姿見に
両側の棧敷に並ぶ夏布団
靴脱ぎて入る会場麻暖簾
文化財の余興場混む梅雨晴間
謂れあるピアノ楽屋に薔薇一枝
太夫座の簾を隠す金屏風

見下ろしに鮎の川ある能舞台
上手より前列に出づ夏の足袋
息溜めて背筋を伸ばす白紗帯
ツレ役と呼吸を合はす絹単衣
地謡の三十人背に汗滲む
奈落なる回り舞台の下涼し
地下廊の往き来幾度氷菓舐む
太鼓橋の先に公園カンナの緋
打ち上げの会場近し河鹿鳴く
着替へして会話の弾む絹扇

山河集

同人作品



神蔵器選

叡山へおーおーと声竹伐会
このたびは近江座へ付く竹伐会
まくなぎを払ひて鑑真廟の前
井伏鱒二の丸縁めがね雲の峰
教頭の七夕竹をひきずり来

浅田 光代

空梅雨や夫ゐて犬もゐて遠き
けふありてチャイコフスキーと万緑と
地下二階子育て中や夏つばめ
飛魚や隠岐に別れの波しぶき
馬入れの祭に島は動くごと
空耳か苔寺に聴く青葉木菟
行く雲と旅してゐたり大夏野
二十四の瞳のごとし四葩咲く

安永 圭子

平田すみ子

信号待つ母の日傘に母のこゑ
呼鈴押す鴨上戸の花仰ぎ

岡田 真澄

夏の蝶睡ればわれも睡るなり
一杓の水打つて天をよるこぼす
迫りくるオペの日時や額の花
玉の汗こころ瘦せずにしてゐたり
青蘆の葉叢にいのち隠しをり
桜の実こぼれ女子大通学路
アールデコ蜘蛛の下りくるシヤンデリア
短夜の夢の中なる英会話
朝より逸る心や蛭狩
麦打や夜着の衿元ちくちくす

山本 浪子

◇特別作品（抄）◇

盛夏へと

柿沼 盟子

初夏の水の手ごたへ抜手切る
枇杷熟るる下駄履きアパート軒つらね
山滴る下りきつても鳥の声
町川に夢幻のはなの海月かな
夏大根卸して終る厨ごと
転た寝の夢にも雨の半夏生
人参ジュースに始む一ト日や朝曇
南中や蔓を自在に凌霄花
茂れるや平野のなかの坂の町

風土独語／神蔵 器



叡山へおーおーと声竹伐会

浅田 光代

鞍馬の竹伐会である。この儀式の竹は、雄蛇を表わす根のない太い雄竹と、雌蛇を表わす根付きの細い雌竹の二種類。四本ずつ八本が用意される。太い雄竹は峯延上人の故事にならって、五段伐り、雌竹の方は儀式の後、元のように山に植え戻される。江戸時代の中頃から近江・丹波の両座に分かれて伐る早さを競い、勝敗により、その年の両地方の豊凶を占った。

竹を伐る人は、大惣法師仲間おんそうぼうしで麻の黒素絹くろけんを着、玉禪たまぜんを取り、武者草鞋むしゃくしに五条袈裟かざらを弁慶かぶりにかづく。昔の鞍馬僧兵あまのぞうへいそのまの凛々しい姿である。浜明史さんに、

僧兵の兵は美男よ竹伐会がある。

掲出句では、はじめ鞍馬と比叡山では少し離れ過ぎているのではないかと思つた。しかし、鞍馬山は五六九メートル、比叡の主峰は八四八メートル、滋賀県との境といつても同じ京都市、鞍馬からは左手、東南の方角で、比叡は近からず遠からず丁度よい距離ではないかと思いかえした。勿論、どんな大声を出しても声は届かないが、声が届くとか届かないと言ふことではない。「おー

おー」と法師の気合の入つた力強い声。二太刀、三太刀、太刀を振りかざして斬りかかり見事に斬り放つ。その声の彼方に叡山は神々しく、また慈愛に満ちて美しい姿を見せている。ただもう、それだけでよいのだ。

けふありてチャイコフスキーと万緑と

安永 圭子

チャイコフスキーといえば、かのバレエ「白鳥の湖」「眠りの森の美女」「くるみ割り人形」など広く知られているが、この句の場合、一曲を上げるとすれば「ヴァイオリン協奏曲二長調作品69」ではなかるうか。第一楽章から第二楽章までおよそ四十八分、その旋律はいつも自然な流れをもつて、色彩にとみ、美しくやさしく力強い、時に哀愁感の漂う美しさは心に深く沁みとおる。そして第三楽章の強烈なりズム、燃える情熱は生きるよろこびとなる。私の最も親しかったひとは、「この世に音楽がある限り生きていたい」と言っていたが、二十一歳で亡くなつてしまった。チャイコフスキーの音楽は耳から、万緑は眼から魂を癒し、生きる力を与えてくれる。

風土集



神蔵器選

梔子やドアノブに掛く回覧板 東京

柿沼 盟子

梅雨寒の陶土に巻かるる木綿かな
耳うち白花ほたるぶくろかな
乗り継ぎの十分間のさくらんぼ
時計草咲く一品ものの民芸店
水底の雲より立ちて杜若 東京
まだ風の見ゆる明るさ夏木立

柴田 久子

皇居

夏木立巡る千代田区一番地
うなぎ食ぶあぐらの中にあぐらの子
青蛙畳に子らと遊びをり
一粒のあと大夕立となりにけり 上尾
なめくぢり月のひかりをしたたらす
恍惚を白鷺映しをりにけり
消灯になだれ網戸の月明り

根岸 善行

蛩のたまゆらといふ長さかな
休診の札揺れてゐる燕の子 高槻
近づきて滝音消えてしまひけり
分校に人形劇団柿の花
仰ぎゐるわれも素足に阿弥陀仏
山崎の水に生れてあめんぼう
更衣へて海辺の谷内六郎館 横須賀
傘立は信楽の甕梅雨深し
駅すこし出て雨に合ふ栗の花
豆腐屋のまだ来る路地や夏至の雨
朝届くみちのくの色さくらんぼ
みちのくに人あり憶ふ紅粉の花 三鷹
梅雨入りや駅に立体交差成る
天守なき二の丸跡や十葉咲く
喫茶店に祭の足袋の五六人

浅田 光代

平田紀美子

布施まき子